

太子道の謎を追う

佐藤 良士

駱駝(ラクダ)が来た道 20年ほど前の奈良のシルクロード博の時、平城宮址に沢山の駱駝が来た。その駱駝が推古天皇の時代に2度も来ているのをご存知だろうか。日本書紀に次のような記事が見える。

599年 秋九月、百濟より駱駝一匹、驢(うさぎうま)一匹、羊二頭を貢る。

618年 秋八月、高麗、方物(くにつもの)を貢る……、併せて土産の駱駝一匹を貢る。

駱駝は遙か西域の砂漠の動物だ。駱駝はパミールを越えて、カシュガルを越えて、タクラマカンを越えて、天山や崑崙を越えてやってきたのだ。それにしても一匹というのはどういうことだろう。確か金と銀の鈴をつけて、二つ並んでいたはずなのに、一匹は死んでしまったのだろうか。

それはそうと、駱駝は百濟や高麗(高句麗)からはるばる海を渡って、九州から瀬戸内海を運ばれて難波津にたどり着いたことは間違いない。この時は推古天皇の時代で明日香に都があった時、駱駝はどの道を明日香まで行ったのか…。

書紀に遣隋使の小野妹子の返礼として、隋の煬帝の特使裴世清が十二人の部下と供に来朝したことが載せられている。608年のこと、それによると……、

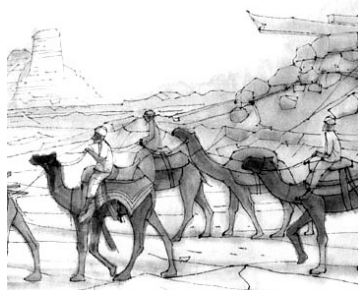
6月15日 客たち(裴世清一行)は、難波津の高麗館の近くに建てた新しい館に泊った。

秋8月3日 唐の客は都へ入った。この日飾馬75匹を遣わして、海石榴市の路上に迎えた。

海石榴市(つばいち)は大和川と山之辺道が交差する交通の要衝で、ここまでは舟で来てここからは、飾り馬75匹と(たぶん多くの役人や楽人も一緒だ)ともに明日香へ入ったのだ。それは山田道を通ったのだろうか。

これが当時の外国使節を迎える公式の道で、599年の第一回の駱駝の旅もおそらく同じ道。駱駝は大和川を小さな川舟に乗せられて、青垣山に囲まれた大和国原を疲れた顔で眺めたのか。駱駝は砂漠の舟だ。その駱駝が舟で運ばれている。おそらく駱駝は「これはラクダ」と言ったのだろうか。

ところが、第二回目の駱駝はどうだろう。その5年前の613年に二上山麓の竹内峠を越える横大路が完成したと、書紀に記載されている。難波津から河内の飛鳥を通り、竹内峠を通して明日香に至る道で外国使節を迎える道として整備された最初の官道である。では618年に高麗からきた駱駝はこの道を辿って、明日香の都に辿りついたのだろうか。その大きな問題を考える前に、我々は古代の道がどのようなものであったのかを知る必要がある。



古代の道 古代にはロマンがあり、壮大なプランがあり、すべてが長大、かつ直線的で直角的であった。推古天皇の頃から始まった明日香京、難波京、藤原京、平城京などの都城の構築には古代人のエネルギーが凝縮されているが、それらを結ぶ道も壮大、かつ長大、かつ直線的で直角的であったのは言うまでもない。

奈良盆地には古代の官道が今も残っている。約2.1キロメートル間隔で南北に縦貫する上つ道、中つ道、下つ道の三本の道と、奈良盆地北部を横断し斑鳩を經由して難波津に通じる北横大路(竜田道)、もう一つが竹内峠越えの横大路、さらに二つの横大路を斜めに結ぶ筋違道(すじかいみち)と呼ばれる道がそれである。

これら畿内の官道は既に7世紀始めの推古朝の時には整備されていたといわれ、それらは東海道、東山道、山陰道、山陽道、南海道、及び大宰府を中心に構成される七道に伸びて行った。

主要官道は幅は10～12mで土を固めて整備され、平野部では道の両側に3m前後の側溝が設けられていた。それから約16キロ間隔で駅家(うまや)を設置して駅馬(はやま)が置かれていた。

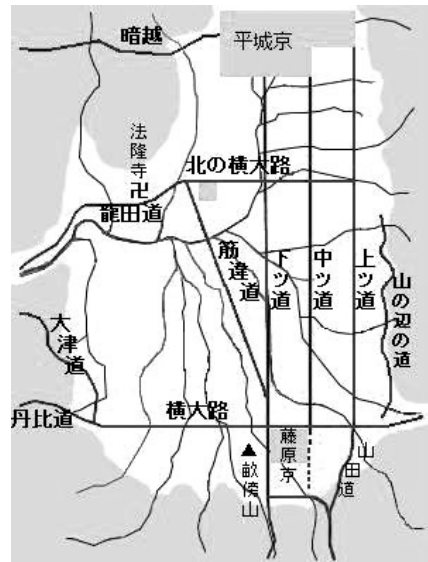
しかしこれらの大路は人民が歩くための道ではなかった。それは古代の中央集権体制を維持するためのものであり、天皇の命令を迅速に地方に伝えるためのものであり、迅速に軍隊を派遣するためのものであり、また地方に派遣される役人が通る道であった。さらに、平城京の朱雀大路に通じる下つ道には特別な役割があった。ここで我々は古代の下つ道の驚くべき姿を知らねばならない。

下つ道 下つ道は平城宮の朱雀門から藤原京まで約23キロ、今でもそのほとんどがはっきりと残っている。しかし今に残る道は古代の姿を伝えるものではない。古代のそれは想像を凌ぐ、壮大かつ長大なものだった。

道幅は側溝を含め23～24mで、その外に10mの路側帯があって約45m前後であることが発掘によって確かめられた。御堂筋より広い道が奈良盆地を南北に真っ直ぐ走っていたわけだ。路側帯は並木を植樹するためのものと考えられるが、哀しいことに、並木が育つ前に平城京は滅びてしまったのではないかな。

下つ道がいつ完成したか分からないが、斉明、天智朝のころに、畿内の他の幹線道路とともに整備されたと思われる。その先に平城宮が造られた時、下つ道は国の威信を示す道、光輝く天皇の都、平城京に導くための道とされたのである。

次に、我々は太子道について知らなければならない。



太子道 太子道には、聖徳太子が斑鳩から明日香の政廟に通ったという伝説があるが、最近の発掘成果はこの素朴な風景が後世に作られた虚像であることを我々に教えてくれた。太子道は他の畿内の官道と同じような道巾と側溝を持った、幹線道路であったのだ。

聖徳太子が斑鳩宮に遷るのは605年、その時にはこの道は完成していたと考えられる。太子は王族のそれも最高権力者だから、当然この道を使って斑鳩に通ったことは確かだが、それだけではなかった。難波津の河内から大和川で奈良盆地に入った後、明日香への最短道路として計画されたのではなかったのか、明日香から太子道、竜田道、河内の渋川道と辿って難波津から遥かに大陸に繋がる道として造られたのではないか、それなら、あの2回目の駱駝は太子道を辿って、明日香の都に行ったと考えてもいいのではないか、何故なら駱駝が来るのは聖徳太子が斑鳩に遷ってから13年も後のことだからである。それは聖徳太子の死の3年前、太子は遥かに西方の菩薩の国からやってきたこの動物を斑鳩の宮で見つめていたのかもしれない。

ここで我々は、今回のルートから外れて斑鳩に行かなくてはならない。何故なら太子道は聖徳太子の道であり、太子道が造られた本当の理由、その謎に迫ろうとした時、聖徳太子の斑鳩を知らなくてはならないからだ。

聖徳太子の道 「聖徳太子は勉強すればするほどわからなくなりますね」

こう言ったのは下見の時の高田さんで、全然勉強していない僕なんかも、確かに書店に並んでいる聖徳太子関係の本の中に「聖徳太子の実像と虚像」とか「聖徳太子はいなかった」とか「悪逆の大王、聖徳太子」という題名をみるたびに、いろいろ考えて悩んでしまうのであるが、それでは絶対、いけないのである。

聖徳太子こそは、我が国で最初に仏教の精神を理解しようとした人物であり、推古朝の中で数々の改革を実行した大政治家であり、大国隋を相手に対等外交を展開した大王である、ということ疑ってはいけないのである。特に懐に太子の姿が印刷されたお札を大切に持っていた我々世代は である。

確かに歴史上の人物の中で聖徳太子ほど実像の分からない人物はいない。聖徳太子を聖人として描いたのは『日本書紀』だ。

それは仏教国土を目指した奈良時代の為政者にとって、百年前に王族の中に仏教に傾倒した皇子が居たというのは恰好の材料になったからであろう。そこから聖徳太子＝聖人説が出発する、だから全ては後世に創り上げられた虚像である、というのが聖人説懐疑派の論拠である。しかし、聖徳太子が偉大な聖人であったことは確かだ。そのことについて、深く考えてみよう。



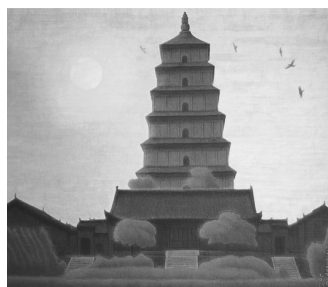
大王の道 まず、聖徳太子が推古朝の中で大王と並ぶ重要な人物として政治を行っていたのは間違いない。この時代は蘇我馬子が仏教を国是と推し進めようとしていた時代である。しかし、古来からの神祀の最高祭祀者である推古天皇は、全面的に仏教を信奉することは出来なかった。そこで神祀りは推古女帝が、仏教の信奉は聖徳太子が担うという形を、馬子は望んだのである。

しかし、聖徳太子は馬子が考えたよりも遥かに聡明で、実行力をもっていた。そのことは、中国の『隋書』倭国伝に「倭王あり、多利思比孤(たりしひこ)と称す」の記事からも分かる。すなわち我が国の王は女帝ではなく、男王であったと中国の史書は記している。それは聖徳太子であることは疑いようがない。この記事は600年だから、太子が斑鳩宮の建設に着手した頃である。その頃太子は大王だった、そして斑鳩は大王の都として建設されようとしていた。

斑鳩は矢田丘陵を背後に控え、東に竜田川、西に富雄川、そして前に大和川が流れる要害の地で、これは新羅や百済の王城と似ているといわれる。この斑鳩の発掘で驚くべき事実が次々に報告された。それは太子が建設した斑鳩宮、あるいは斑鳩寺(若草伽藍、後の法隆寺)は、太子道と同じように西に20度傾いて地割りがされていたのだ。さらに斑鳩周辺の条理制の地割りは同じように20度傾いていることがわかったのである。

我々はこのことから驚くべき事実を知らなければならぬ。聖徳太子はこの斑鳩に平城京よりも百年早く、藤原京よりも80年早く、隋の長安のような計画都市を建設しようとしていた。

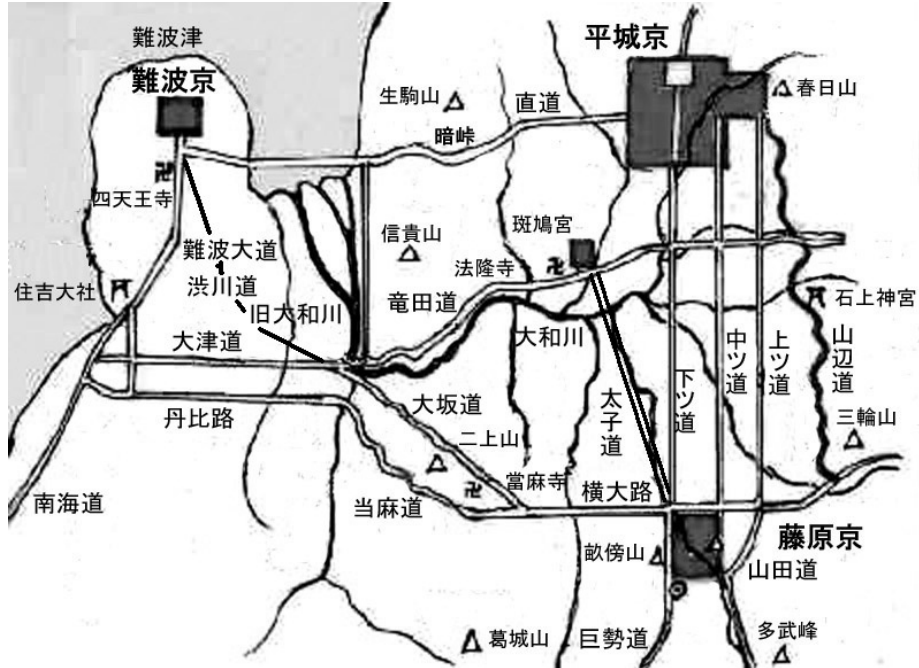
太子道はその都から、もう一人の大王が居る明日香に伸びる道、それは文字通り「大王の道」だったのである。



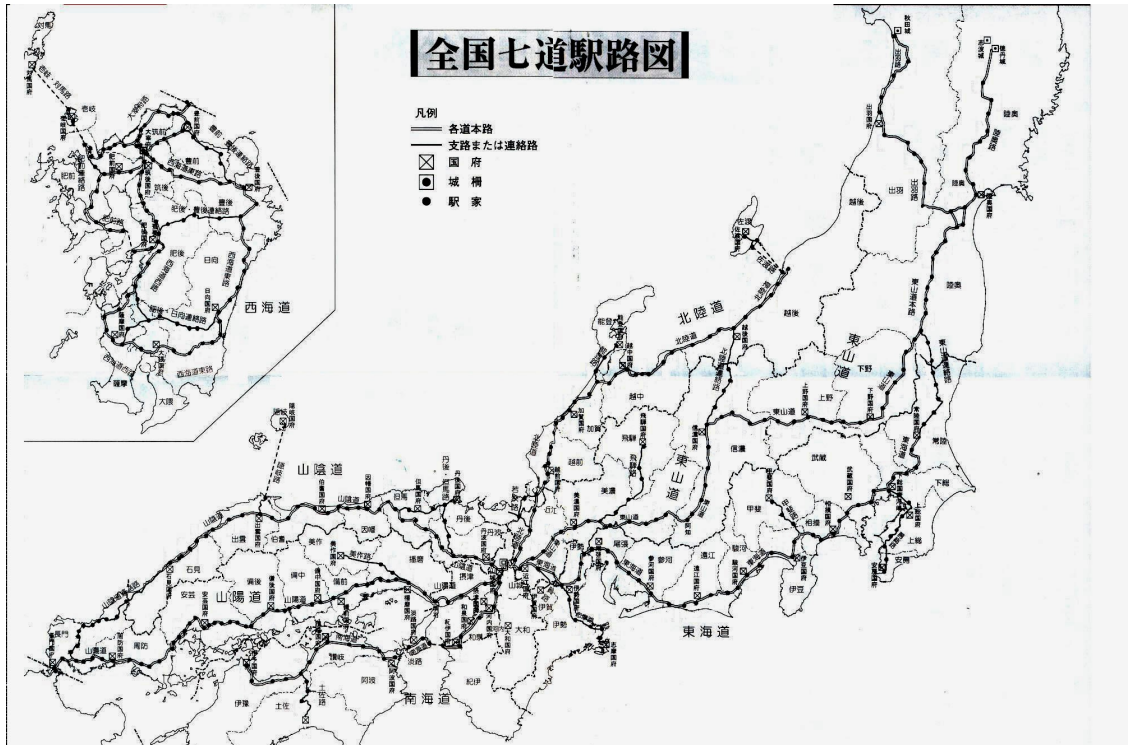
【関連年表】

- 574年 敏達3年、厩戸御子誕生、父は用明天皇、母は穴穂部間人皇女。
- 592年 **推古天皇、明日香の豊浦宮で即位。厩戸御子は皇太子となった。**
- 593年 厩戸御子、摂政となり国政を補佐。難波に四天王寺を建立した。
- 600年 『隋書』倭国伝に「倭王あり、多利思比孤(たりしひこ)と称す」の記事。
- 601年 **斑鳩宮を造営した。**
- 603年 官位十二階の制定。推古天皇、小懇田宮に遷る。
- 604年 憲法十七条を造る。
- 605年 **厩戸御子、斑鳩宮に遷る。**
- 607年 斑鳩寺(法隆寺若草伽藍)を建立。小野妹子一行を遣隋使として派遣。
- 608年 隋の使節、裴世清が十二人の部下とともに来訪。(大和川經由)
- 613年 **難波から都に至る大道を造る(竹内街道 横大路)**
- 622年 聖徳太子、薨去。

【地図1 古代の畿内の道の概要図】



【地図2 古代の全国七道駅路図】



(資料) 聖徳太子の歴史を読む (上田正昭、千田稔)
 日本歴史地図 (原紙、古代編) 他